

アブラツノザメの頭部軟骨 腫瘍成長促す酵素を抑制

弘大と田向商店(青森)が研究

商品開発など模索



記者会見に臨む野坂講師(右から2人目)、田向専務(右)

県内で漁獲されるサメの一種「アブラツノザメ」の頭部軟骨に、悪性腫瘍(しゅよう)の成長に必要な一部の酵素を抑制する効果があることが、弘前大学のマウス実験で分かった。頭部軟骨の粉末を活用した製品開発を進める青森市の田向商店と同大学との共同研究。薬事法上、抗腫瘍効果をつたうことはできないが、粉末を練り込んだ商品開発など、医学的な幅広い利用法を模索している。



アブラツノザメの頭部軟骨粉末を使った製品の試作品

弘前大学保健学研一同社の田向常城専務ら
究科の野坂大喜講師、が22日、弘前市の同大

学で記者会見し、実験結果を発表するとも、頭部軟骨の粉末を練り込んだ、同社試作のめんやせんべいを披露した。

アブラツノザメは北海道や本県で水揚げされており、県内では「スクメ」などの料理で食べられている。

野坂講師によると、

実験では、一部の大腸がんや膵(すい)がんの成長に必要な栄養素を運ぶ酵素2種類の活性を阻害する効果を測定。悪性腫瘍のあるマウスに、頭部軟骨の粉末を混ぜた餌を食べさせたところ、20〜40日目の生存率が通常の餌を食べさせたマウスに比べ、最大で30%高かった。

医薬品ではないため、薬事法の制約から抗腫瘍効果をつたうことはできないが、同社は他の業者に粉末を販売し、サプリメント製

品の素材として利用してもらったことを考えているという。田向専務は「しっかりとした実験結果があるのとないうちは、業者との商談で反応が違う。他の県産の健康食品などと組み合わせる活用できれば」と語った。

共同研究は、全国中小企業団体中央会の補助金を受けたほか、弘大が共同研究の経費を補助する「弘大GOG Oファンド」にも認定されている。弘大などは、抗腫瘍効果がある具体的な成分の特定を含め、今後も、粉末についての研究を続けていくという。

この画像は当該ページに限って
東奥日報社が利用を許諾したものです。